全国発信記事 ▲▽▲▽ 高松支部

瀬戸内海の玄関口 宇野港を元気づける「フェリーてしま」「快速艇みらい」

岡山県玉野市の宇野港と香川県の豊島・小豆島を結ぶ小豆島豊島フェリー株式会社は、「フェリーてしま」と新造船の快速艇「みらい」の2隻体制で、宇野港～豊島（家浦港・唐櫃港）～小豆島（土庄港）の航路を運航しています。豊島と小豆島の生活航路を担っている、小豆島豊島フェリーの現場組合員の皆さんが基点とする宇野港を紹介します

▽宇野港の変遷

玉野市が誕生したのは昭和15年で、それ以前から全国的に知られていた地名は「宇野」。かつて本州から四国へ旧国鉄を乗り継いで渡るには、岡山駅から宇野線を経由し宇高連絡船を利用するのが唯一の手段だった。宇野と高松の間を結ぶ連絡船が行き交う宇野港は、時代とともに姿を変えた。

▽宇高航路開通のため「宇野港築港は県政100年の大計」

宇野港は明治42年に竣工。翌年には宇野線も開通し、以来、本州と四国を結ぶ大動脈の役目を担ってきた。その立役者が第8代岡山県知事・檜垣直右で、当時の日本経済は、日露戦争後で疲弊しており、県議会も財政難を理由に宇野港築港に猛反対したが、檜垣は「県政百年の発展を画する重要な事業」であると反対を押し切って港湾建設を着工。

昭和5年には岡山県内初の開港場の指定を受け、昭和7年に宇野～大連間の定期航路も開かれた。そして人のほかに鉄道車両・貨物やコンテナを積んで海の上を航走する鉄道連絡船として、宇高連絡船が活躍した。しかし、昭和63年4月10日、瀬戸大橋開通によって宇高連絡船は廃止され、78年間の任務を終えた。

▽これからの宇野港の役割「連絡船の着く港」から「クルーズポート・ウノ」へ

昭和30年代半ばから登場したフェリーは貨物のトラック輸送や地域住民の足として昼夜を問わず運航し、現在では世界的に有名なアートアイランド直島、小豆島や豊島など島嶼部への主要航路として活用されている。さらに、数万トン級の豪華客船が寄港するクルーズポート・ウノへと生まれ変わり、飛鳥Ⅱ、ぱしふいっくびいなす・にっぽん丸などの客船を迎え入れている。平成22年、国内の重要港湾103港のうち、43港が重点港湾として位置づけられ、そのひとつに宇野港が選定された。

▽ものづくりの街＝塩と造船

海運拠点である宇野港を有する玉野市に造船業が興ったのは大正の初期。四方を海に囲まれた日本が世界へ向けて漕ぎ出していた時代。また、この地域には「児島三白」という言葉が残っており、三白とはイカナゴ・綿・塩を指し、この地の三大産業が漁業・機業・塩業だったことを表す。

中でも製塩業は、弥生時代にまで遡ることが製塩土器の発掘から明らかにされており、19世紀はじめにはシーボルトが玉野地区の塩田に立ち寄って調査したという記録が残っている(シーボルト「江戸参府紀行」)。瀬戸内の晴れの多い気候が、塩づくりには欠かせない条件で、造船業と製塩業は、それぞれ創業約100年の造船所と、創業180年余の製塩企業として 今も操業

し、ものづくりの歴史を刻み続けている。

今年、5回目を迎えた瀬戸内国際芸術祭の夏会期・秋会期は、宇野港にも芸術作品が展示されている。

宇野港から豊島や小豆島への移動は、小豆島豊島フェリーを利用するのが便利だ。

「海員だより」